

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

“点字力”の可能性： 多文化共生社会における点字の役割

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広瀬, 浩二郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4813

ショートノート

“点字力”の可能性

—多文化共生社会における点字の役割—

広瀬浩二郎 (国立民族学博物館)

本稿の目的は「点字＝視覚障害者用の特殊な文字」という固定観念を打破することである。点字の特徴として以下の二つを挙げることができる。

①「少ない材料から多くを生み出したたかな創造力」：わずか6個の点の組み合わせで日本語の仮名はもちろん、数字、アルファベット、さらには音符まで表せること。②「常識にとらわれないしなやかな発想力」：文字は線で表現するという晴眼者（マジョリティ）の論理にこだわらず、触覚による読み書きに適した文字として提案されたこと。点字に込められた創造力と発想力、そしてそれを社会に発信するエネルギーの総称が“点字力”である。本稿では視覚障害者文化の観点から“点字力”を理論化する。

まず“点字力”を具体的に分析するための第一の課題は、視覚障害者の文字としての点字の歴史と役割を跡付けることである。その議論を基礎としつつ、本稿後半では触覚を利用したサインとして点字を再評価する。全体を通じて、幅広い視点から点字の新たな可能性に迫りたい。結論では、多文化共生社会をめざす21世紀の日本にとって“点字力”が持つ意味について言及する。

キーワード：点字力、ルイ・ブライユ、触覚、多文化共生、視覚障害者文化

Various Possibilities of “Braille Power”: In Search of the Roles of Braille in the Multicultural Society

Kojiro HIROSE (National Museum of Ethnology)

The purpose of this paper is to propose that Braille is not a writing system only for the visually impaired. We can point out two special qualities of Braille as follows: (1) outstanding creativity that allows many things to be expressed by very few elements—Braille uses different combinations of merely six dot positions to express Japanese kana (the phonetic alphabet of Japanese), numerals, the Roman alphabet and even musical notes; (2) flexible, unconventional inventiveness—Braille is not bound by the linear writing style that is logical for people with sight, and it provides symbols for reading and writing through the sense of touch. What I call ‘Braille power’ is the integration of the creativity and inventiveness we find in Braille, and the energy to send it out into society. In this paper, I will theorize ‘Braille power’ as a culture of the visually impaired.

In this paper, first I trace the history and role of Braille as letters for the visually impaired so that I can make a clear analysis of ‘Braille power’. Second, I reevaluate Braille as a system of tactile symbols for all people. Throughout the paper, I investigate new possibilities of Braille.

In conclusion, I discuss the significance of ‘Braille power’ for Japanese multicultural society in the 21st century.

Key words: Braille power, Louis Braille, the sense of touch, multiculturalism, culture of the visually impaired

1. はじめに—「点字の展示」がめざしたもの—

2009年8月13日～11月24日、国立民族学博物館において企画展「点字の考案者ルイ・ブライユ生誕200年記念『…点天展…』」が開催された。13歳の時に失明し、以来30年近く点字を使っている私は、視覚障害の当事者として、さらには障害者文化を研究する人類学者として本展の企画・運営に携わった。

企画展のテーマは、視覚障害者の文字、社会参加のためのツールである点字の歴史と現状を概説し、点字の市民権拡大を図ることである。この目標に関しては、いささか自己満足ではあるが、予想以上の達成感を得ることができた。各種新聞で「点字=視覚障害者のための文字」の意義をたくさんの人々に伝える展覧会として本展が取り上げられた。来館者のアンケートでも「点字の仕組みや視覚障害者の生活を知ることができ勉強になった」という感想が多く、幅広い来館者から本展が好意的に受け入れられたことがわかる。ただし「伝える」「勉強になった」などのコメントは、見常者¹⁾中心の社会にあって点字がまだまだマイナーなものであることを逆説的に示しているともいえる。

医学の進歩により、今後ますます視覚障害者の数は減少するだろう。また、パソコン等の普及で若い視覚障害者の「点字離れ」が進行し、一方では中途失明者の点字習得の困難さも指摘されている。このような状況下、視覚障害者用の文字である点字の未来はどうなるのか。私自身は22世紀にも点字が生き残ることを確信しているが、そのためのキーワードが“点字力”なのである。

本稿では企画展の成果も踏まえつつ、まず視覚障害者文化としての点字の重要性を再確認する。その際、「by the blind」「for the blind」「of the blind」の3方向から分析を試みる。そして最後に「from the blind」の視点から、点字が見常者にもたらずもの、「さわる文字」の今日的存在価値を考察する。2節～5節の論述を通じて、私が提唱する“点字力”という新概念を理論化し、多文化共生社会における点字の役割を展望したい。

2. 「by」—だれが点字を創ったのか—

点字の第一の特徴は、視覚障害者が自らの経験と知識を活かして創造した触覚文字だという点である。点字考案以前の盲教育においては凸字（浮き出し文字）が使用されていた（大河原，1987）。世界最古の盲学校であるパリ訓盲院の創設者バラントン・アユイは視覚障害者と見常者が同じ文字を読み書きすることを重視し、アルファベットの凸字による教科書を製作した。日本最初の盲学校である京都盲啞院でも木刻文字や蝸盤文字が使われていた²⁾。

日本でも欧米でも開設当初の盲学校では見常者の教師が大半であり、彼らにとって墨字³⁾を凹凸化した教材は扱いやすいものだった。社会の多数派である見常者と円滑に交流・通信するためには、視覚障害者が墨字を使うことが必要なのも確かだろう。しかし、凸字は触読に適していなかった。さらに、凸字を用いて生徒がメモや手紙を書くことはきわめて困難だった。日本では漢字を凸字にした明治10年代の鍼灸・箏曲の教科書が残っているが、それらを一字ずつ解読していた生徒の苦労は想像を絶する。

アルファベットにしても仮名・漢字にしても、一般に線による文字は視覚で認識しやすい。イメージ（像）として瞬時に文字をとらえることができる視覚に対し、触覚（指先による触読）には点を線、面へと広げていく難しさがある。直線と曲線が不規則に混在する墨字を習い覚えるためには、専門的なトレーニングが不可欠だった。そのような時間と労力を費やす教育実践が19世紀の盲学校で行なわれていたことは評価できるが、凸字による学習効果は点字に比して、はるかに劣っていた。

ルイ・ブライユ(1809~1852)はフランス軍の砲兵大尉シャルル・バルビエが考案した暗号である「夜の文字」(ソノグラフィ)にヒントを得て、試行錯誤の末に6点でアルファベットや数字、さまざまな記号を書き表す方法を作り上げた。点を利用した触覚のコミュニケーションという意味では点字のルーツはバルビエのアイディアにあるわけだが、わずか6個の点の組み合わせで文字を表現する独創的

な配列表は、ブライユの才能と情熱によって完成された。ここではブライユが当事者の実体験に立脚して、視覚障害者が迅速かつ正確に読み書きできる触覚文字を探究したこと、彼の点字が見常者の教師たちに受け入れられるまでに長い年月を要したことを強調しておきたい（本稿末の「付録Ⅰ」参照）。

ブライユが創出した6点点字は、19世紀半ばにはヨーロッパ各国、米国でも受容される。日本でもアルファベット点字を日本語の五十音に翻案する作業が東京盲啞学校で進められ、明治23(1890)年11月に教員・石川倉次(1859~1944)の提案が採択された。日本点字制定から120年が経つ今日でも、多少の表記法の変遷はあったものの、基本的に石川が翻案した仮名文字体系の点字が使用されている。

石川自身は見常者だったが、彼の案の採用を決めた「点字選定会」には複数の視覚障害者も参加していた。日本点字は、当時の東京盲啞学校の教師・生徒の叡知の集大成ともいえよう（本稿末の「付録Ⅱ」参照）。他国に比べ日本では短時間で全国に点字が普及しているが、その背景には石川をはじめとする盲教育関係者、あるいは視覚障害者のパイオニアたちの努力があったことも忘れてはならない。

3. 「for」—だれが点字を使うのか—

点字は視覚障害者のための文字である。この大原則を疑う人はいないだろう。ところが近年、かならずしも大原則が当たり前のものとして通用しなくなっている現状が見受けられる。見常者中心の社会にあって、視覚障害者は情報弱者である。社会的弱者ともいえる彼らへの情報保障という点字本来の役割を確認するために、大正11(1922)年5月に創刊された『点字大阪毎日』（現『点字毎日』⁴⁾の「発刊の言葉」を紹介したい（本稿末の「付録Ⅲ」参照）。

この「発刊の言葉」は点字新聞紙上での掲載だったため、見常者の間ではほとんど知られていない。しかし、大正デモクラシーの隠れた重要文献として高く評価できるだろう。ここから抜粋して点字のエッセンスを抽出すれば、「普通市民と肩を並べて活動するための知識、勇気、慰安を盲人に与える」となる。『点字大阪毎日』の運動などもあって、

大正14(1925)年の衆議院議員選挙法（普通選挙法）で点字投票が認められる。日本は点字投票を制度化した世界で最初の国である。

点字新聞、選挙などの例からもわかるように、第二次世界大戦前の我が国は点字による情報保障という面で先進国とはいわぬまでも、けっして欧米に遅れていなかった。そんな日本の点字を取り巻く現況はどうなっているのだろうか。本節では「案内板やパンフレットなどにおける使えない点字、読めない点字表示の流布」「日本点字表記法の迷走」の二つにポイントを絞って論じてみたい。

視覚障害者の大学進学率の推移を調べてみると、戦後60余年の間に点字使用者の「完全参加と平等」が進展しているのは明らかである（広瀬, 2005）。その背景には情報保障をめぐるハード、ソフト両面の変化があった。パソコンによる自動点訳に代表される技術革新、主婦などを中心とする点訳・音訳ボランティアの増加は、視覚障害者の社会進出を助長した。1990年代以降、駅の券売機、公共施設の案内板などで点字を目にする機会が増えた。商品のイメージアップを兼ねて、家電製品や食品パックに点字表示を入れるケースも珍しくない。所用で来日した視覚障害関係の外国人は、一様に日本の点字サインの充実ぶりに感心する。

バリアフリー、ユニバーサル・デザインが流行語ともなり、点字は「だれにも優しい社会」のシンボルとして位置づけられるようになった。この流れ自体は基本的に歓迎すべきものである。しかし、「使えない点字」がしばしば見られることも指摘せねばならない。せっかく点字案内板を設置しているのに、板の高さや角度に対する配慮が足りず、触読しにくい場所に置かれている例は意外に多い。また、案内板への点字ブロックによる誘導がなく、高価な触地図が宝の持ち腐れになっていることもある。

昨今では点字が商売になるということで、多種多様な業者が点字ビジネスに参入するようになった。多業者の競争により点字サインの質が向上し、価格も安くなるのが理想だが、残念ながら現実には「読めない点字」の登場を惹起している。点字表記法をきちんと学習せず五十音の一覧表を見ただけで安易

に作られた点字入りチラシ、点が不鮮明なままプリンターで大量印刷された点字パンフレットなどによく出会う。街中のポストやタクシーの点字シールが逆さまに貼られて暗号になっていたり、駅の階段手すり部分の点字が故意に削られたり汚されたりしている事例など、枚挙に暇がない。

「使えない点字」「読めない点字」の氾濫には、視覚障害者自身の責任もあるだろう。点字が「普通市民と肩を並べて活動するための知識、勇気、慰安を盲人に与える」ものだという説得力を持って語れるのは、やはり視覚障害者のみなのである。だれのための点字なのかを明示するためには、ユーザーが声を上げていくしかない。言い古された理念だが、マイノリティである当事者の立場を尊重するのが「だれにも優しい社会」の大前提となることを力説したい。

次に日本点字表記法の変遷、複雑化する点訳ルールの問題を解説しよう。石川倉次が提案し、今日でも日本の視覚障害者が使用する点字は仮名文字体系である。速読性を重視する表音式表記を採用しているので、長音符の使い方、助詞の「は」「へ」の扱いが墨字と異なる。また、判読しやすいように文節ごとにスペースを挿入する分かち書きを行なう。たとえば「ぼくわ□きょーとえ□いきます」となる。分かち書きの規則は多岐にわたっているので（日本点字委員会、2001）、ここでは詳細を省略する。

元来、仮名文字体系の点字と漢字・仮名混じりの墨字表記に「違い」が生じるのは当然である。スペース節約も意識して、1960年代までは分かち書きをするだけで、句読点を用いない点字表記が一般的だった（日本点字委員会、2007）。今でも年配の点字読者の間では、読点使用に反対する者が多い。ところが最近、やや乱暴な要約をすると、点字の表記をできるだけ墨字に近づけようという傾向が強くなっている。その背景には技術革新とボランティアという前述した日本社会の二つの変化がある。

1980年代後半には、点字で文章を書いていた視覚障害者が、パソコン（点字ワープロ）を用いて墨字文書を作成することが可能となった。従来の点字・墨字の相互変換には、点字のルールを熟知した見常

者のサポートが必須だったが、現在では点字ユーザーと点字を知らない見常者がEメールで文字情報をやり取りするのが日常化している。ITが視覚障害者にもたらした恩恵は大きく、パソコンは情報弱者のハンディを補う武器となっているのである。視覚障害者が墨字に直接アクセスする機会が増えたことによって、点字と墨字の表記の「違い」に戸惑いを感じる人が多くなった。若い視覚障害者の中で読点使用に反対する者はいないし、墨字との整合性を重んじ、表記法の一部改正を求める意見も出ている。

一方、「正しい分かち書きのルール」の確立を願うのが、全国各地の点字図書館の蔵書などを製作する点訳ボランティアたちである。自立語内部の切れ続きなど、点字ユーザーにとって大差のない問題でも、「正しい点訳」を心がけるボランティアには重要であり、何らかの答えが必要となる⁵⁾。その結果、点字表記法、とくに分かち書きのルールは細分化し、点字の普及を阻む要因ともなっている。たとえば墨字表記において、仮名と漢字の使い分けは筆者の意思にある程度委ねられているが、「正しい点訳」には分かち書き上の自由度は存在しない。

もちろん、点字と点訳の微妙な乖離に関してはボランティアのみを責めることはできないが、かつてなかった墨字ユーザーからの要望が、点字の世界に善悪両面の変更を迫っているのは確かである。これ以上、点字と点訳の相違、分かち書きルールの細部に踏み込むことは避けるが、すくなくとも視覚障害当事者が読み書きしやすい点字、中学生程度の初学者でも親しめる柔軟な点訳規則の定着を望みたい。

視覚障害者と点字の関係を多角的に考える際、聴覚障害者（ろう者）たちが手話を拠所としつつ「ろう文化」を宣揚している事例は一つの参考となる。近年、多文化理解教育の一環として手話を第二外国語科目とする大学が徐々に増えている。手話と同様に、点字も福祉の枠組みとは一線を画する新しい角度からのアプローチが進むことが期待される⁶⁾。手話は言語としての明確な位置づけができるが（亀井、2009）、日本点字は日本語を書き表すための文字体系であるから、厳密な意味での言語ではない。

だが、もともと点字は墨字との「違い」の上に成立したものであることを再認識し、その「違い」を継承する形で多文化理解教育における点字のプレゼンスを高めていかねばなるまい。

4. 「of」—だれが点字を伝えるのか—

点字は視覚障害者が保持してきた文化である。文化という表現はやや曖昧だが、点字が視覚障害者にとって唯一の文字であった時代には、多くの先人たちが点字によって自己の世界観、人生観を鍛え、点字に愛情と自信を持って生きていた。昨今、デジタル録音図書の充実で音声による情報入手が容易となり、スクリーン・リーダー（画面読み上げソフト）を駆使するインターネット利用も一般化している。視覚障害者にとって点字は多様な情報入手方法の一つの選択肢とされ、その重要性は低下した。日本だけでなく、「点字離れ」は世界各国の視覚障害者に共通する現象となっている。

とはいえ、視覚障害者がじっくり読書しようとするれば、自分のペースで能動的に情報を獲得する手段として、点字に勝るものはない。また、日常生活における私的なメモなどでも、簡単に書いて、すぐに確認できるという面で、点字は便利である。能動性と簡便性が点字の最大の特徴であり、これは音声情報ではカバーできない触覚文字の長所といえよう。紙媒体から電子媒体への更なる移行は進むにしても、点字が完全に消滅することはないだろう。

しかし、能動性と簡便性だけでは文化としてのアピールは弱いし、今後の技術革新によって点字の長所を乗り越える画期的な機器が開発される可能性も大きい。では、視覚障害者の文化として点字を伝えていく必要性はどこにあるのか。明治期に書かれたある文章から「視覚障害者の文字」としての点字の原点を探ってみよう。

神戸訓盲院（現在の兵庫県立視覚特別支援学校）の設立者・左近允孝之進（1870~1909）は、明治39（1906）年1月1日、日本初の点字新聞『あけぼの』を発刊し、全国の視覚障害者に送った。左近允は鹿児島出身で、日清戦争従軍後に全盲となった。彼は按摩・鍼灸の修業を続ける中で、視覚障害者の教養

の低さを痛感した。明治後期の日本は、近代国家の仲間入りをすべく新しい知識や技術を積極的に導入していた。それらの情報は、当時盛んに発行された新聞を通じて広く国民に伝えられた。だが、視覚障害者は文字を持たないために、一般社会から排除されていたのである。

明治23（1890）年に制定された日本点字に出会った左近允は、訓盲院設立と同時に、点字新聞の発刊を決意した。20世紀初頭の日本には、欧米から輸入された高価な点字製版機が2台あるのみで、点字の刊行物は少なかった。左近允は少年時代に鹿児島で地元新聞社を見学した経験に基づき、点字活字による印刷機⁷⁾を自身で考案し、『あけぼの』の発行や点字図書の出版に取り組んだ。視覚障害者が見常者と同等の教養を身につけ、「人」として生きていく道を切り開いた左近允は、その夢の結実を見ることなく明治42（1909）年に39歳で早世した。

2009年10月、左近允が執筆した「発刊の言葉」を含む『あけぼの』創刊号が福岡県で発見され、視覚障害関係者の間で話題となった。前述の『点字大阪毎日』の16年前、日露戦争直後に点字新聞が発行されていた事実はこれまでほとんど知られておらず、『あけぼの』の実物も筑波大学附属視覚特別支援学校が100号以降をわずかに収蔵するのみだった。私は『あけぼの』が日本の近代史研究の重要な新史料となることを確信したので、「発刊の言葉」を墨字訳して引用する（本稿末の「付録IV」参照）。

この「発刊の言葉」の中で注目すべきは「六つの光は輝きて、闇の夜は明け初めぬ」という文言である。六つの光は点字を意味している。闇から光への転換はありふれた言い回しだが、失明体験（闇）から出発し、点字新聞の発刊（光）に辿り着いた左近允の発言だけに重みがある。『あけぼの』という新聞タイトルには、点字が左近允個人に、そして明治期の視覚障害者全体に「光」を与えたことが見事に凝縮されている。左近允の先駆的業績は、まさに日本の視覚障害者たちにとって「あけぼの」であり、彼の「六つの光」に託した熱情は、大正期の『点字大阪毎日』などに受け継がれていく。

日本ライトハウスの創設者・岩橋武夫（1898~1954）

は『あけぼの』の精神を継承し、昭和13(1938)年に点字の総合雑誌『黎明』を創刊した。岩橋は「愛盲」の語を用いて戦前・戦後の視覚障害者運動をリードしたが、彼の課題は社会啓発と同時に、マイノリティである視覚障害者の団結を図ることだった。敗戦直後の『黎明』において、彼は次のように述べている。「愛盲運動とは盲人が一般社会から愛されるためへの運動ではなしに、盲人がその住む闇の祖国・盲界を愛し、盲教育を愛し、盲人職業を愛し、相互に美しい愛を自己献身的に捧げ合って初めて成立する」(岩橋, 1947: 2)。

岩橋は盲界、盲人教育、盲人職業の源泉である点字の価値にも頻繁に言及している。「愛盲」の概念は、共生社会、ノーマライゼーションを標榜する現代の視覚障害者にそのまま受け入れられるものではないが、目が見えないことに何らかの積極的アイデンティティを見出す思考は、21世紀にも応用できるだろう。点字は単なる文字というだけでなく、視覚障害者集団の象徴、まさしく文化だった。その文化を今日まで伝承してきたのは視覚障害者自身であったという歴史も忘れてはなるまい。『あけぼの』『黎明』は、視覚障害者の文化を同世代、そして次世代へと伝える「of the blind」の点字メディアだったといえよう。そこには「六つの光」によって視覚障害者の連帯と社会的地位の向上を意図する左近允や岩橋の同胞への「愛」⁸⁾が込められていた。

5. 「from」—だれが点字を活かすのか—

以上、2節～4節の分析によって、視覚障害者文化としての点字の歴史と現在が明らかとなった。点字の本質は「by the blind」(創)「for the blind」(使)「of the blind」(伝)の3点にまとめることができる。視覚障害者自らが創り、使い、伝える「六つの光」は、今後もユニークな文字文化として存在感を保持し続けるに違いない。ここで点字の基本である「by」(創)と「for」(使)に関して、異論を唱える者はいないだろう。しかし、第三の「of」については、歴史的意義は認めるものの、未来に向かう理論としては説得力に欠ける面がある。

テレビやインターネットでさまざまな情報にアク

セスできる今日、点字新聞の役割は相対的に低下している。パソコンを活用して一般社会で働く若い視覚障害者には、もはや盲界という「闇の祖国」への郷愁はない。特殊教育から特別支援教育への移行の下、盲学校ではなく地域の普通学校に進学する視覚障害児も増加している。さらに、視覚障害者の職業的選択の幅が広がり、鍼灸・按摩、箏曲などの伝統的職種は彼らの専業ではなくなった。視覚障害者のライフスタイルが多様化する中、盲人教育、盲人職業という意識は希薄化している。

このような時代状況下で点字の生き残りをめざすためには、アイヌ語などの少数言語の保護政策に学ぶことも必要だろう。点字は言語そのものではないが、創・使・伝を特徴とするコミュニケーションの道具という点において、マイノリティの言語問題に通じる側面を持っている。学校教育や各種の人権啓発事業において、少数言語と連携を取りながら、点字の21世紀的あり方を模索することが大切である。

点字の創造的未來を築くためには、「of the blind」を補完する「from the blind」という新たな視座の確立が望まれる。左近允や岩橋たちが追求めた「of」では、どちらかといえば視覚障害者間の情報伝達、当事者同士が意思を伝え合うことに重きが置かれていた。この「of」の原則を基礎としつつ、これからは「from the blind」の姿勢で点字の活力を見常者に発信していくことが重要となろう。

そもそも私が企画展「…点天展…」で強調したのは、ルイ・ブライユが単なる視覚障害者用の文字の考案者ではないという史論(私論)だった。点字の特徴は、わずか6個の点の組み合わせで多種多様な言語、数字、音符などを表現できることである。つまり、ブライユは点というシンプルな素材を用いて、この世界のあらゆる事象を記録することに挑戦したともいえる。

かつて視覚障害者は「音」と「声」の領域で個性を発揮していた。前近代の人々の「目に見えないもの」への信頼と宗教的ニーズから生まれたのが、死霊と交信するイタコの口寄せであり、琵琶法師が創造・伝播した『平家物語』だった。近代社会の到来とともに、文字による知識伝達が主流となる中、視

覚障害者は文字を持たない存在として排除された。そのような弱者に文字を与え、見常者中心の社会に参加する道を開いたのがブライユの業績である。

だが、じつは彼の偉業は“字”に限定されるものではない。ブライユは文字をも含む森羅万象を「点で示す」新たな方法を提案した。それは“音”や“声”に匹敵する触覚による“示”の誕生だった。見た目には複雑な事象をあえて単純な点で示そうとしたブライユの「点示」は、視覚（見常者）に対する触覚（視覚障害者）からの異議申し立てともいえるだろう。見常者が近代化の過程で失ってしまった感覚（生き方）の多様性を呼び覚ます起爆剤となるのが「点示」なのである。ルイ・ブライユが「点示の創始者」だとすれば、彼の理念を具現化した「点示の実践者」がヘレン・ケラー（1880~1968）だった。

従来、ヘレンは見えない・聞こえない・喋れない三重苦を克服した「奇跡の人」として尊敬されてきた。視覚も聴覚も「使えない」彼女が懸命に努力して、米国最難関の大学にパスし、社会事業家となって活躍する。三つのマイナスを抱えるヘレンが、五体満足の健常者でもなかなかできないことを成し遂げる。その苦難と栄光の生涯が、とりわけ日本では「奇跡」として賞賛されるのである（岩橋，1980）。

音声による情報入手が困難なヘレンにとって、教養を身につける最大の、そしてほとんど唯一の方法は点字を読むことだった。100年以上も前、点字本がきわめて少ない時代に大学で勉強した彼女の苦労は並大抵のものではなかった。だが、彼女の奮闘を「奇跡」として解釈するだけでは新たなヘレン・ケラー像は描けない。企画展「…点天展…」では「触覚の開拓者」としてヘレンを再評価することを提案した（広瀬，2010）。

映画『奇跡の人』のクライマックスでサリヴァン先生はヘレンの手を取り、井戸のポンプから流れる水にさわらせ「water」と指文字で綴る。ここでヘレンは世の中のあらゆる物に名前があることを悟る。いわば彼女は触覚で世界を認識したといえよう。ヘレンが視覚と聴覚を「使わない」代わりに触覚の潜在力を極限まで追求したことこそ、「奇跡」と呼ぶのである。「使えない」（マイナス=量）から

「使わない」（プラス=質）への発想の転換は、テレビやインターネットなどによる情報に支配された視覚優位の現代社会にあつて、感覚の多様性を再考するきっかけともなろう。

ヘレン・ケラーは究極の触覚人間だが、彼女の先輩ともいえるルイ・ブライユは視覚を「使わない」人生の中で「点示」を編み出し、独自の触覚文字を残した。まず視覚障害者自身が点字とは触覚を活かした文字であることを再認識し、「さわる力」の豊かさをアピールしていくべきではなかろうか。現在の市民向け点字講座、小・中学校における点字学習では視覚を「使えない」障害者の不自由・不利益のみに関心が寄せられているが、視覚を「使わない」触覚人間たちが主導する「点示」講習会が立案されてもいいはずである。点字の触読などを介して、見常者が自己の身体に眠る触覚の可能性に気づく。そんな小さな「奇跡」が連続すれば、多文化共生をめざす日本社会は活性化するだろう。

6. おわりに—“点字力”の未来に向けて—

さて、「by」「for」「of」は視覚障害者文化である点字を定義する3要素だが、「from the blind」（活）はこの文化を発展させる方向性を示している。視覚障害者文化である点字を成り立たせるための論理（創・使・伝）、そしてそれを社会に発信する「活」のエネルギーを総称して「点字力」と呼ぶことにしたい。点字に「力」の字を加えたのは、視覚障害者文化が含み持つ社会変革のダイナミズムを鼓吹する戦略ともいえよう。

まず点字を文化とする意識（創・使・伝の共通理解）が21世紀の人類に広まった上で、多文化共生社会における点字の活用術を考えていくことが重要である。見常者はもちろん、視覚障害当事者間にも“点字力”の自覚が薄い現状で、「だれもが楽しめる点字」「点字を通じた異文化間コミュニケーション」などと言っても、空疎な共生社会論、上辺だけのバリアフリー政策に屋上屋を架すのみだろう。私は「活」の方向性として、あえて「with」ではなく「from」を使ったが、それは“点字力”の担い手である視覚障害者の主体性を重視したいからである。

以下では本稿のまとめとして、「点字力」を充実させる四つの課題を整理することにしよう。

①「by」：盲学校（視覚特別支援学校）における点字教育の拡充。昨今の盲学校は児童・生徒数の減少、重複障害児の受け入れなどにより、点字を用いる授業、点字そのものの学習が実施しにくい状況となっている。だが、視覚障害者に対する点字の基礎指導は盲学校が担当すべきである。点字教育においては、とくに視覚障害当事者が自分たちの使いやすい文字として点字を考案し、育んできた歴史を周知徹底することが大切だろう。点字の成立・発展史を支えた「by the blind」の精神は、視覚障害者に勇氣と自信を与えるものである。

②「for」：普通小・中学校、一般市民向けの点字講習会の新展開。最近では小学3・4年生の国語教科書などで点字が紹介され、全国の小・中学校で点字の体験学習が行なわれるようになった。また福祉系の大学や専門学校の授業、各種ボランティア養成講座で点字に接する人も増えている。これらは視覚を「使えない」障害者に対する優しさを育てる面で有益である。しかし、点字が触覚文字であることはあまり強調されていない。点字を通じて、さわる楽しさや奥深さを体験する講習会があってもいいのではなかろうか。視覚を「使わない」障害者の「さわる力」に着目すれば、優しさのみに偏る「for the blind」の思想も変化するだろう。

③「of」：視覚障害者の近代史の発掘。本稿でも一部引用したが、『あけぼの』『点字大阪毎日』『黎明』など、視覚障害の読者を対象とする点字メディアが近代の日本にあって重要な役割を果たしてきた。点字のみで書かれた雑誌、新聞は近年の情報バリアフリーの理念とは相容れないものだが、質と量の両面において、単なる情報保障を超える意義を有していた。点字刊行物は見常者には利用しにくい史料だが、視覚を「使わない」研究者が責任を持って「知られざる近代史」を掘り起こしていくことが期待される。共生、ノーマライゼーションなどが尊重される今だからこそ、歴史に根ざす「of the blind」の理論構築が必要なのではなかろうか。

④「from」：点字（点示）を活用した新たな人間

観の確立。将来的には触覚文字である点字が福祉の枠組みではなく、一般教養として見常者に受け入れられることが望ましい。点字の一般教養化については、すでに実績のある英語などの外国語教育の功罪に学ぶことも不可欠だろう。繰り返しになるが「点字＝視覚障害者の文化」という観念が成熟しない状況で、安易に点字の一般教養化を求めても時期尚早、非現実的である。上記①～③の課題がある程度クリアされた段階で、「from the blind」の方向での文化発信が有効となるだろう。点字（点示）に込められた創造力と発想力は、多文化共生をめざし変容する日本社会に指針を与えてくれるはずである。

「点字力」の可能性は広く深い。本稿がその沃野を開拓するための一助となれば幸いである。

注

- 1) 現在、「目が見える人＝晴眼者」「目が見えない（見えにくい）人＝視覚障害者」というのが一般的な呼称である。しかし、見える（肯定形）、見えない（否定形）を使う定義では、どうしても優劣を内包することになる。私は「視覚に依拠した生活をする人＝見常者」「触覚に依拠した生活をする人＝触常者」という新しい呼称を提案している（広瀬，2009）。本稿でも論旨を明確にするため、あえて晴眼者の意で「見常者」を用いる場合がある。

なお、日本では1970年代後半ごろから「盲人」という語に代わって「視覚障害者」がよく用いられるようになった。無論、この二語の使い分けについては個人的な好みもあるし、とくにこだわりがない場合も多い。ただし「人」ではなく「者」の字を使うことで、社会への統合を意識する面が強まったのは確かだろう。本稿では「視覚障害者＝点字使用者」として論述するが、実際には視覚障害者の中に多数の弱視者が含まれることにも注意しなければならない。

- 2) 私は点字以前の視覚障害者用文字を集めた企画展「さわる文字、さわる世界」を2006年に国立民族学博物館で開催した（広瀬，2007:91-118）。京都盲啞院関係の資料は京都府立盲学校の資料室に所蔵され、京都府の重要文化財指定を受けているが、視覚障害関係者以外に広く紹介されたのは本展が最初だった。

この企画展の展示資料を選定する際、大河原欽吾『点字発達史』から有益な情報を得た。本書初版は1937年に培風館から刊行されているが、現在でも包括的な視覚障害者用文字の歴史を知るための基本文献である。なお、本稿執筆に当たっては、日本点字図書館発行の復刊本（1987年）を参照した。

- 3) 視覚障害関係者の間では、点字に対して目で認識す

る文字（通常文字）は「墨字」と呼ばれている。手書き文字も、パソコンを使ってプリントアウトした文字も「墨字」である。点字ユーザーの私にとっては点字が「通常文字」であり、そもそも何をもって「通常」とするのかが曖昧なので、本稿では「墨字」という語を用いることにしたい。

- 4) 毎日新聞社が発行する週刊の点字新聞。80年以上も点字の新聞が継続している例は世界的にも珍しく、現在は通巻4500号を超えている。
- 5) 大多数の点訳ボランティアが座右の書としている『点字表記辞典（改訂新版）』に従えば、漢語と和語の違いにより次のような点字表記をすることになる（点字表記辞典編集委員会、2002）。「車椅子」（くるまこいす）、「藁ぶき屋根」（わらぶきやね）、「土地探し」（とちさがし）、「部屋探し」（へやさがし）、「味噌ラーメン」（みそらーめん）、「塩ラーメン」（しおらーめん）。日本語の多様な複合名詞を点字表記するために何らかのルールが必要なのは理解できるが、そのルールがどこまで点字使用者（視覚障害者）に支持されているかは疑問である。
- 6) 私は2005年度から大阪樟蔭女子大学において「バリアフリー文化論（日本文化史実習）」を担当している。本授業は琵琶法師やイタコの歴史と合わせて、視覚障害者文化の一つとして点字の成立・発展史を概説するプログラムである。
- 7) 2009年8月、兵庫県立盲学校同窓会は特許出願時の設計図を元にして、左近允孝之進の点字活版印刷機を復元した。本機は企画展「…点天展…」開催に当たって国立民族学博物館に寄贈され、日本における視覚障害者の文化史を裏付ける貴重な資料として保管されることとなった。
- 8) 左近允も岩橋もキリスト教徒だった。使命感に裏打ちされた彼らの自己犠牲的活動の根底には、キリスト教の人類愛（アガペー）があったと思われる。

【参考文献】

- 広瀬浩二郎（2005）. バリアフリーからフリーバリアへ—近代日本を照射する視覚障害者たちの“見果てぬ夢”—文化人類学, 70(3), 379-398.
- 広瀬浩二郎（編）（2007）. だれもが楽しめるユニバーサル・ミュージアム—“つくる”と“ひらく”の現場から—読書工房
- 広瀬浩二郎（2009）. さわる文化への招待—触覚でみる手学問のすすめ—世界思想社
- 広瀬浩二郎（2010）. フィーリングワーク入門—感覚の多様性を呼び覚まそう—世界思想, 37, 1-4.
- 岩橋英行（1980）. 青い鳥のうた—ヘレン・ケラーと日本—日本放送出版協会
- 岩橋武夫（1947）. 巻頭言 黎明, 106号
- 亀井伸孝（2009）. 手話の世界を訪ねよう 岩波書店
- 日本点字委員会（編）（2001）. 日本点字表記法2001年版 日本点字委員会
- 日本点字委員会（編）（2007）. 資料に見る点字表記法の変遷 日本点字委員会
- 大河原欽吾（1987）. 点字発達史 日本点字図書館（1937／培風館）
- 点字表記辞典編集委員会（編）（2002）. 点字表記辞典（改訂新版） 視覚障害者支援総合センター
- 【付録1】
- 点字の考案者ルイ・ブライユ関連年表
- 1809年 1月4日、パリから北東約40キロにあるクープレ村に生まれる。
- 1812年（3歳） 馬具職人の父の仕事部屋でナイフ（錐）により片方の目を突き負傷。他の目も交感性眼炎を起こして失明する。
- 1819年（10歳） 2月15日、パリ盲学校に入学。6月、フランス軍の砲兵大尉だったバルビエは、フランス学士院に書簡を送り、軍の暗号として考案した「ソノグラフィー」（12点点字）に対する批評を求める。
- 1820年（11歳） 年末、バルビエは12点点字が視覚障害者の役に立つのではないかと考え、パリ盲学校を訪問。ギイエ校長は12点点字の採用を断る。
- 1821年（12歳） 2月、ギイエのあとを継いでピニエがパリ盲学校の校長となる。彼はバルビエの訪問を受けて、12点点字を盲学校で実験的に使用する。点と線でフランス語の発音を表現する12点点字は、浮き出し文字よりわかりやすく、自分で書くこともできるので、生徒たちに歓迎される。
- 1822年（13歳） バルビエ（55歳）に面会し、12点点字について、①音ではなく文字を書けるように、②句読点や数字・楽譜も書けるように、③縦長の12点は指で読むのが不便であるから点の数を減らすように、などの改良を依頼。バルビエは自分の方式に固執する。
- 1824年（15歳） バルビエの12点点字を半分の6点にすることを考える。
- 1825年（16歳） バルビエの12点点字を改良し、アルファベット（アクセント記号も含む）と数字や句読点を6つの点と小さな線の組み合わせで書き表す方法を作り上げる。また、合理的な点字楽譜の表記体系も工夫する。この方法は生徒たちの間に広まり、ピニエ校長も有効性を認める。
- 1828年（19歳） 8月、母校の助教師に採用され、文法・地理・算数・音楽を教える。
- 1829年（20歳） 『言葉、音楽、単旋律聖歌を盲人のために点で書き表す方法』と題する本を出版。
- 1833年（24歳） 正教師に任命される。盲学校近くの教会のオルガン奏者となる。
- 1836年（27歳） 盲学校の生徒だったイギリス人ヘイターの依頼で「W」をアルファベットの点字に加える（フランス語ではWを用いないため、ブライユの点字には含まれていなかった）。
- 1840年（31歳） 点字に好意的だった校長ピニエ退職。点字使用に強く反対していた副校長デュフォーが校長

となる。

- 1843年(34歳) 4月初め、病氣静養のためクーブレに帰り、6ヶ月間滞在した後、パリの盲学校に戻る。ブライユの不在中、デュフォール校長は点字を禁止する。11月15日、現在の地に新しい盲学校の校舎が完成する。
- 1844年(35歳) 2月22日、新校舎落成式が挙行される。政府関係者も含む多くの来客の前で、生徒たちがブライユ点字で読み書きを実演し、喝采を博した。以後、点字の使用禁止令は解かれる。
- 1852年(43歳) 1月6日、盲学校の寄宿舎で死亡。クーブレ村に埋葬される。
- 1854年 フランス政府はブライユ点字を視覚障害者の文字として公式に認める。
- 1952年 6月22日、ブライユの遺体は故郷クーブレ村からパリに移され、ピクトール・ユゴーやエミール・ゾラなど多くの国民的英雄を祀る「パンテオン」に葬られる。

【付録II】

日本点字の翻案者・石川倉次関連年表

- 1859(安政6)年 1月26日、遠江国浜松名残組屋敷に生まれる。父は浜松藩士。幼少期に藩の学問所で漢籍や西洋の砲術、英語を学ぶ。
- 1868(明治元)年(9歳) 12月、藩主の国替えにともない、家族で上総国鶴舞藩に移り住む。
- 1875(明治8)年(16歳) 3月18日、千葉師範学校教員検定試験に合格、一等授業生に任命される。4月より水沼小学校で読書・算術・習字を教える。
- 1884(明治17)年(25歳) 1月27日、東京虎ノ門で開かれた「かなのくわい」会場で、小西信八と初めて会う。
- 1886(明治19)年(27歳) 3月6日、小西信八の招きで、訓盲啞院に赴任する。
- 1887(明治20)年(28歳) 10月、訓盲啞院は東京盲啞学校と改称。小西信八は、上野の東京教育博物館館長・手島精一からイギリス製の点字盤を借りて帰り、ローマ字式点字で日本語を生徒に教える。小西は、ブライユ点字が視覚障害者の文字として優れていることを確認する。12月9日、東京盲啞学校助教諭および書記に任じられる。かねてより墨字による教育に疑問を感じていた小西から、ブライユ点字を日本語の仮名に組み替えることを依頼される。
- 1889(明治22)年(30歳) 東京盲啞学校教官・遠山邦太郎がブライユの6点点字で五十音を表すことにほぼ成功する。石川はこれに刺激されて、さらに研究を続け、現在の日本点字を創案する。
- 1890(明治23)年(31歳) 11月1日、東京盲啞学校で開かれた第四回点字選定会において、石川倉次の点字案が日本点字として採択される。
- 1893(明治26)年(34歳) 9月11日、東京盲啞学校訓導となる。

- 1894(明治27)年(35歳) 3月8日、前年に輸入した点字製版機を使って、日本で最初の点字出版物「大婚廿五ノ春ヲ祝シ奉ル(訓盲字本)」(「明治天皇銀婚式奉祝歌集」)を発行。
- 1898(明治31)年(39歳) 2月15日、点字拗音を発表。日本点字の完成。
- 1899(明治32)年(40歳) 12月4日、東京高等師範学校教諭兼訓導に任ぜられる。東京盲啞学校でも国語の授業を受け持つ。
- 1900(明治33)年(41歳) 8月、パリで開かれた万国博覧会から、石川倉次の点字に対して金杯が贈られる。
- 1901(明治34)年(42歳) 4月22日、石川倉次が翻案した点字五十音、および点字拗音が「日本訓盲点字」として官報に掲載される。
- 1910(明治43)年(51歳) 盲啞分離が行なわれ、東京盲学校は雑司ヶ谷に新築される。石川は東京聾啞学校教諭として残る。
- 1925(大正14)年(66歳) 3月31日、小西信八校長とともに東京聾啞学校を退職。
- 1940(昭和15)年(81歳) 11月1日、点字制定50周年記念式が行なわれ、東京盲学校に来校、職員・生徒から謝恩の言葉を受ける。
- 1944(昭和19)年(85歳) 12月23日、疎開先の群馬県安中町で死亡。

※「ルイ・ブライユ関連年表」および「石川倉次関連年表」は、日本点字委員会提供の資料に基づき、企画展「…点天展…」のために作成したものである。本稿掲載に当たって、項目を取捨選択し再編集した。

【付録III】

『点字大阪毎日』の発刊の言葉

点字大阪毎日はいよいよ本日、第一号を発刊します。発刊の目的は、失明者に対して自ら読み得る新聞を提供し、本社発行の各種の新聞と相まちて、新聞の文化的使命を徹底せしめんとするにほかにありません。かくして、一方には盲人に対し一個の独立せる市民として社会に活動するに必要な知識と勇気と慰安とを与え、他方にはこれまで盲人に対して眠れる社会の良心を呼び覚ますとするのであります。盲人教育発達し、盲人の自覚せる欧米には、今日、普通人と失明者との差別、ほとんど撤廃せられ、盲人は学芸に、実務に、その他社会各方面において、普通市民と肩を並べて活動しているのであります。悲しいかな日本には、まだ盲人が自己の力に目覚めず、社会もまた盲人に対する人道的責任観念薄きため、失明者はまったく廃人としての取り扱いを受けているありさまです。まことに文明国としての一大恥辱であります。点字大阪毎日は、この恥辱をぬぐい去る文化的戦士として、世にいでたのであります。読者諸君の愛護と私どもの奮闘とにより、本紙が健全なる発達を遂げ、日本における文明機関の一として、世界の盲人界に気を吐く時期に一日も早く達せんことを衷心より祈ります。

※「発刊の言葉」原文は点字だが、企画展「…点天展…」のために点字毎日編集部との協力を得て墨字訳した。

【付録IV】

点字新聞『あけぼの』の発刊の言葉

振古未曾有の戦勝によって国運いよいよ盛んならんとするの時、我ら盲界のみ、あにひとり旧態に安んずべけんや、宜しく時世に伴い大いに伸張發達せざるべからざるや、論なきなり。我輩つとに薰陶のことに従い、しきりにその将来を慮るところ有り。ついに点字新聞の発行を企て、ここにあけぼのの色めでたく、その初号を発刊するに至れり。六つの光は輝きて、闇の夜は明け初めぬ。凱旋の曲勇ましく、迎えし新玉の年の初めにおいて、初めて読者にまみゆるは本紙の最も光榮とするところなり。戦勝国の真発展に伴う我が盲界の新現象として、いささか世に示すに足らんか。思うに出版事業は人智の開發に關係するところ頗る大なり。しかるに近來我が盲界に点字を学ぶ者、日に増加しつつあるにもかかわらず、その読み物乏しきために、せつかく習い得たる文字も、その効用少なきが如き有様なるは遺憾の次第なりとす。されば我輩が今回、新聞紙発行の計画をなすも決して無益のことにあらざるを信ずるなり。もし、それ春の朝の学び

の窓、秋の夕べの家の庭、本紙を友とせば、文の林の花の色、学びの海の月の影、自然のそれにも増して楽しみ多かるべし。ただ恨むらくは創業の際、編集、印刷の体裁未だ整わず、ことに紙数の少なきは經濟上やむを得ざるものありて、読者の満足を買うこと能わざるを、希わくば少しく整理の日を待ちて改良を加えんことを期す。愛読者諸君、幸いにこれを利用せられんことを請う。なほ、この一号は見本として一般民に進呈することとし、訓盲院卒業生二五〇余名、盲人会員中の有志者三〇〇余名、他に新聞社一一〇余箇所、総計六七〇余部を発送せり。願わくば本社の微志を賛せられ引き続き愛読あらんことを。敬白

※『あけぼの』については、古賀副武氏、安富義哲氏（ともに元兵庫県立盲学校教諭）から種々ご教示いただいた。「発刊の言葉」の本稿への引用も、両氏のご協力により可能となった。記して感謝の意を表したい。

(2009年12月11日受付)
(2010年5月8日修正版受付)
(2010年5月23日掲載決定)